

〔「中国工芸名品展」によせて〕

大和文華館所蔵の黄地紫彩花卉人物文尊式瓶一形・色・文様に注目して

大和文華館所蔵の中国陶磁より、明時代の名品である「黄地紫彩花卉人物文尊式瓶」(図1、以降は本作品と記述)を取りあげます。本作品の外底には、青花で二重円が表され、その内に「大明萬曆年製」という銘が記されています。この青花銘より、明の万暦年間(1573~1620)に景德鎮の官窯で焼成されたことが知られます。本作品の類品が、万暦帝の陵墓である定陵から発掘されていることから、当時の最高級の陶磁器であることが分かります。本稿では、本作品の特色を見るために、形・色・文様の三点に注目したいと思います。

まず形について。本作品は喇叭形に開いた口頸部、膨らみをおびた胴部、外に広がる圈足を持った瓶ですが、この形状は、古代の青銅器「尊」に倣ったものです。尊は儀式に用いる酒や水をためておくために用いられました。殷(商)時代の青銅器「饗養文尊」(図2、出光美術館蔵)を見ると、口頸部、胴部、圈足に鱗状の稜飾が付いています。簡略化した形ですが、本作品にも鱗状の飾りがみとめられます。

古くより中国陶磁は、青銅器の形を模してきました。殷・周時代において、重要な儀礼の器として用いられたのは青銅器でした。こうした格の高さが、青銅器の形が好まれた背景として考えられます。また、宋時代より、文人たちが礼制の象徴として古代青銅器を愛好するようになり、倣古銅器も製作されます。明時代にはその愛好がさらに深まり、文人の絵画

にはしばしば古代風の青銅器が登場し、陶磁器においても古代青銅器の形に倣ったものが多く製作されました。「尊」は壺として使いやすいこともあってか、陶磁器で好まれた青銅器の形の一つでした。特に万暦年間には尊形の陶磁器の瓶が多く見られ、本作品以外にも五彩や青花の作例が残されています。

続いて色について。本作品は、黒の絵の具で文様を表し、文様の内を紫釉、外を黄釉で塗り詰めています。深みのある黄と紫のコントラストが魅力的です。明時代には、鮮やかな色の釉薬を用いた華やかな陶磁器が展開し、百花繚乱の様相を呈します。その中には本作品のように、文様の周囲を色釉で塗り詰めるものがあり、大和文華館の所蔵品にもいくつかの種類が見られます。「黄地青花花文皿」(図3、大和文華館蔵)はその早い例です。見込みの中心にコバルト顔料で梔子を描き、その周囲に四種の折枝を描き、透明釉を施して焼成した後、文様の周囲を黄釉で埋め、再び低火度で焼きつけています。外底の青花銘より、弘治年間(1488~1505)の官窯の製品であることが分かります。こうした黄地青花の作品は宣徳年間(1426~35)頃には少数見られ、弘治年間には作例が増えます。嘉靖年間(1522~66)の官窯の製品に見られるのが黄地紅彩と黄地緑彩です。呼称は似ているものの、技法は異なります。「黄地紅彩電涛文壺」(図4、大和文華館蔵)は、白磁胎の上にも黄釉を全体に施して焼成し、

黒の絵の具で竜や波涛を描き、文様を残して背景を赤色の釉薬で埋めて再び焼いています。赤の下に黄が施されているために、赤色がより明るく感じられます。「黄地緑彩樹下人物文鉢」(図5、大和文華館蔵)は、文様を緑、背景を黄としたものですが、上釉のない素地に直接黄釉と緑釉をかけて焼成している点と、文様の輪郭を線刻で表している点が先の「黄地紅彩電涛文壺」とは異なります。色釉の境目が柔らかく滲んでいるのが特徴的で、「素三彩」の技法となります。

さて、万暦年間の作である本作品に目を戻すと、素焼きした素地に直接黄釉と紫釉を施していることから、黄地緑彩と同様の素三彩の技法であることが分かります。なお、文様の輪郭を線刻ではなく黒の絵の具で表すのは黄地緑彩とは異なります。清時代の素三彩は文様を黒の絵の具で表すものが多く、その先駆けと言えます。

黄地青花と黄地紅彩は釉上彩、黄地緑彩と黄地紫彩は素三彩と技法は違いますが、鮮烈な二色のコントラストの美しさが愛され、こうした背景を塗り詰めた作品が工夫され展開したのでしょう。二色の組み合わせには黄釉がよく用いられています。中国では黄色は皇帝を象徴する色であり、官窯の製品として好ましいものであったのだと考えられます。また、紫色も天帝を象徴する色でした。本作品の黄と紫の組み合わせは、皇帝にふさわしいものであり、明時代に

は紫色は三彩でしか表現されなかったため、素三彩の技法が選ばれたのではないかと澤田和人氏は指摘されています(『名品選3 大和文華館の陶磁』大和文華館、2000年)。二色で濃厚に塗り詰めた作品であるからこそ、色が持つ意味や魅力もよく伝わるものとなっています。

最後に文様について。本作品の形は青銅器写しですが、文様は青銅器には倣っていません。圈足には花の折枝が、胴部には人物文が、口頸部には寿石と花・虫が描かれています。故事などに基づく人物文を主文とし、花の折枝を周縁部にあしらう構成は、元から明時代の陶磁器によく見られるものですが、虫を大きく描くのは比較的珍しいです。口頸部に描かれる虫は、蜻蛉、蝶などで、花の上を飛んでいます(図6)。鳥ではなく虫を花に合わせる絵画は、元・明時代の江蘇省常州(毗陵)を中心に隆盛しました(参考:図7「草虫図」部分、呂敬甫筆、曼殊院蔵)。本作品の虫の文様には、こうした草虫画の隆盛が影響している可能性もあるでしょう。

本作品は、中国陶磁の華やかな展開の一端を見せるとともに、当時の文化における関心や流行なども窺える貴重な作品と言えます。

(宮崎もも)

※図2は『出光美術館蔵品図録 中国の工芸』(出光美術館、1989年)、図7は『花鳥画の世界10』(学習研究社、1980年)より複写いたしました。



図1



図2



図3



図4



図5



図6



図7